

■ 書 評



エビデンスに基づく学校メンタルヘルスの実践
一自殺・学級崩壊・いじめ・不登校の防止と解消に向けて

長尾圭造 編著，
 三重県医師会学校メンタルヘルス分科会 編
 明石書店
 2018年12月 144頁
 本体価格 2,500+税

本書は、わが国の児童青年期精神医学において長く指導的な役割を担い貢献してきた著者が、県医師会の分科会会長として晩年の10数年間に力を注いだ、医療と教育との連携に関する取り組みをまとめた学校メンタルヘルスの実践書である。2016年に著者が発表した子どものうつ病に関する書籍を本欄において紹介したが、そのなかで著者は教育との連携に基づく予防活動に言及しており、本書はそのような予防活動の詳細を具体的に紹介したものであり、あわせて読まれると理解が深まるであろう。晩年入退院を繰り返しながら病床にあっても、本書を完成することができたのは、日本医師会主催で毎年秋に開催される全国学校保健・学校医大会で、県の学校メンタルヘルスの取り組みを著者が毎年発表してきた成果である。これまでの著者の書籍同様、著者がこれまで実践してきた工夫を惜しげもなく具体的に視覚的に理解しやすく紹介している。そのため、本書も学校精神保健にかかわるさまざまな職種に有用である。著者が長くともに仕事をしてきた描画療法士による装丁は、やわらかで温かみがあり、学校メンタルヘルスを含め著者の臨床実践の全体的なイメージと重なる。本書が上梓される2週ほど前に著者が亡くなられたことが悔やまれる。

本書の構成は、4部11章からなる。第1部は、著者が実施した「学校メンタルヘルス」の取り組みをさまざまな立場の方が実践できるようにパッケージ化したマニュアルである。第2部では、著者の学校メンタルヘルスの実践活動の詳細について紹介している。第3部では、学校メンタルヘルス活動の波及効果、この活動が教員の意識にもたらす影響について述べ、第4

部では、学校メンタルヘルスの今日的課題と背景問題に関して考察している。

不登校やいじめ、自殺の問題などもからみ、精神疾患の予防を含めた児童・思春期からの精神保健活動への期待が最近ますます増している。これらの問題は時期や地域を問わず発生しており、学校精神保健にかかわるすべての関係者が安定して連携できる地域支援体制の構築が望まれており、そこに本書の狙いがある。誰でも、どこでも取り組み、あとで検証可能なサポートの仕組みをつくることが本書の目標である。医療・福祉と教育との連携は、児童精神科臨床において必須である。しかし、基本的に、医療・福祉が厚生労働省管轄であるのに対し、教育は文部科学省管轄であり、また福祉の担い手は市区町村であるのに対し、教員は市区町村立の学校であってもほとんどが都道府県の教育委員会から派遣されるため、医療・福祉と教育の地域連携の担い手の間のコミュニケーションを継続して円滑に行うためには、さまざまな工夫が必要となる。このような仕組みは、学校教員と、学校医やスクールカウンセラーなどとの多職種協働作業が必須で、養護教諭や心理士、小児科医や児童精神科医などが活動の中心となる。しかし、児童精神科医が少ない地域も多く、著者が本書で紹介したような児童精神科医による地域の学校へのアウトリーチ活動の組織的な運営が重要である。

本書に、あとがきはない。はしがきや欄外の追記コメントを読み進めると、著者が晩年に本書を執筆した意図の一端が見え隠れし、特に第2部の最後に、この取り組みに対する著者の児童精神科臨床の実践家としての思いが伝わってくる。子どもの精神保健活動の意義を本当の意味で関係者に理解してもらうことは難しく、そのための方法にはまだコンセンサスの得られたものがないことは、著者も十分に理解していたのであろう。そのうえで、手探りではあるものの、できる限り科学的に効果検証できる方法を模索し、今そこにいる子どもたちのメンタルヘルスの保全のために懸命に活動してきたのであろう。このような実践を続けた著者の思いを、次世代で引き継ぎ、より実効性のあるシステムを構築しなければならない。

(高橋秀俊)